

平曲譜本の音便表記：青洲文庫本平家正節と尾崎家本平家正節（2）

著者	奥村 和子
引用	言語文化学研究. 日本語日本文学編. 8, p.1-12
URL	http://doi.org/10.24729/00002586

平曲譜本の音便表記

—青洲文庫本平家正節と尾崎家本平家正節 (2)—

奥村和子

1. はじめに

いわゆる平曲譜本の諸本のうち、アクセントをはじめとする音韻史の研究対象とされるのは多く『平家正節』であるが、その中には『尾崎家本平家正節』（以下、『尾崎本』）を扱うものと『青洲文庫本平家正節』（以下、『青洲本』）を扱うものがある。この2本は本文や墨譜が酷似しており、近世期京都アクセントの調査対象としてはほとんど差がないと考えられる。しかし、文字遣いや振り仮名、発音注記等にはかなりの相違が見られるのであって、その目的次第ではいずれの本を扱うかで『平家正節』の特徴が変わってくることになる。巻一の濁点について2本の比較を行った調査では、青洲本における濁点の数が尾崎本のそれに比べて倍近くにのぼり、尾崎本では濁点の用いられ方にある種の限定があったものが、青洲本ではややゆるやかになっている様が見られた¹⁾。その他、発音注記や送り仮名・振り仮名等によって読みの確定できる例も青洲本には多く、全体的に発音をわかりやすくする工夫が凝らされている。では、それらの工夫が（相対的に）少ない尾崎本においてその表記にはどのような傾向が見られるのか。四段活用動詞の音便形と非音便形（連用形原形）を例にとって見てみたい。

ともに索引が作成される等、『平家正節』の主たる譜本として扱われ、先後関係の論じられることもある²⁾ 尾崎本と青洲本について、その表記の特徴を明らかにしておくことは意味のあることと思われる。以下、平曲譜本の音便の有無に関する表記について整理とその報告を行い、濁点をはじめとする発音注記についても調査結果の概要に触れることとする。

2. 音便表記

2-1. 巻二における音便率

まず、尾崎本と青洲本の巻二における「四段活用動詞+て、たり」形のうち、音便の有無を判定できる用例を数で示すと以下の通りである³⁾。

	尾崎本	青洲本	(参)大系本
音便	148 (80%)	200 (83%)	133 (76%)
非音便	37 (20%)	40 (17%)	42 (24%)
合計	184	240	175

()内の数値を見ると、全体的にそれほど極端な差は見られないが、大系本、尾崎本、青洲本の順に非音便率が下がり、音便率は逆に上がっている。

具体的な用例数を見ると、非音便形の用例数は3本を通してそれほど差がないが、音便形の用例数は青洲本でかなり多くなる。尾崎本には活用語尾が表記されないため、音便とも非音便とも判定のできない用例が多いのだが⁴⁾、仮にこれらを「不明」としてその数を示すと次のようになる。

	尾崎本	青洲本	(参)大系本
音便	148 (60%)	200 (82%)	133 (54%)
非音便	37 (15%)	40 (16%)	42 (17%)
不明	60 (24%)	5 (2%)	70 (29%)
合計	245	245	245

やはり尾崎本での「不明」の用例数が相当に多く、青洲本ではそれがほとんど見られない。すなわち、青洲本では音便の有無がかなりの割合で判定できるわけだが、では尾崎本の「不明」はどのようなものなのか。また、青洲本の判定と尾崎本、大系本の表記との関係はどうなっているのか。

2-2. 本による相違

尾崎本と青洲本との相違という点に着目して見ると、この2本で音便の有無が異なる例は1例のみである(尾崎本「聞いて」青洲本「聞きて」巻二・横笛・地の文 ※大系本では「聞き、」)。この他に音便の有無が異なる例はないが、片方が「不明」になることによって「相違」する箇所は多い。その対応関係を次に示す。

尾崎本の「音便」148

青洲本で「音便」146、「非音便」1、「不明」1

(参)大系本で「音便」94、「非音便」18、「不明」36

尾崎本の「非音便」37

青洲本で「音便」0、「非音便」36、「不明」1

(参)大系本で「音便」2、「非音便」19、「不明」16

尾崎本の「不明」60

青洲本で「音便」54、「非音便」3、「不明」3

(参) 大系本で「音便」37、「非音便」7、「不明」16

このように尾崎本を中心に見た場合、尾崎本の音便例、非音便例は青洲本と著しく似通っていることが見てとれるが、逆に青洲本を中心にみると、

青洲本の「音便」200

尾崎本で「音便」146、「非音便」0、「不明」54

(参) 大系本で「音便」128、「非音便」25、「不明」47

青洲本の「非音便」40

尾崎本で「音便」1、「非音便」36、「不明」3

(参) 大系本で「音便」3、「非音便」18、「不明」19

青洲本の「不明」5

尾崎本で「音便」1、「非音便」1、「不明」3

(参) 大系本で「音便」2、「非音便」1、「不明」2

と、先にも述べたように音便の数に差があり、尾崎本で「不明」であったものを音便形表記にしている箇所が多い。

なお、尾崎本、青洲本いずれも、大系本で非音便形であったものが音便形となっている例が目立つようであるが、これは、覚一本（大系本）と、平家正節（尾崎本、青洲本）との成立年代による差がある程度影響していると考えられる。

2-3. 動詞別

動詞別に音便・非音便の用例数を一覧にすると文末の表の如くである。

青洲本における「不明」の用例は「書たり」「よつ引て」「召て」「しろし召て」「以て」の5例であるが、このうち「召す」はサ行動詞かつ敬語という音便を起こしにくい特徴を持つ動詞であり、「しろしめす」もこれに準じる。そして「書く」「持つ」は逆に非音便形の用例が見られない、音便を起こしやすい動詞である。「よつ引く」については青洲本の巻二において他の用例が見られないが、大系本や尾崎本の該当箇所では「よつ引いて」と音便表記である。すなわち、青洲本で「不明」表記となっている箇所は、いずれもわざわざ表記せずとも、当時において音便の有無がある程度明らかな動詞だったのではないかと考えられる。

一方で尾崎本の「不明」例は60例と数が多く、青洲本ほど読みの確定できるものに限っているわけではないが、「もつ（音便4、不明7）」「ある（音便3、不明4）」「とる（音便11、非音便1、不明5）」「よる（音便6、不明4）」のように、「不明」の用例が多い動詞は、音便の有無に偏りのあるものが多い（「とる」の

非音便形1例は和歌であるが故の例外であろう)。また、音便形の数が青洲本に比べてかなり少ないのに対して、非音便形の数は青洲本とそれほど変わらないところからして、非音便形は比較的積極的に表記していたとも考えられる。ただし、例外なく非音便形で用いられる「申す」が、複数回にわたって「不明」表記されていること等を考えあわせると、「非音便形を表記した」というよりも、「当時における少数形を表記した」という記述が適当かもしれない。自明のことは省略し、当時少数形であったものに注記をする、という傾向は、前の青洲本とも程度の差こそあれ共通しており、更にこれまでに明らかにされてきた尾崎本の捨て仮名や濁点等の付される方針と通じるところである。

2-4. その他

その他、動詞の活用行別、文体別（会話・地の文・歌）、アクセント型別（アクセント型のはっきりしている2拍・3拍動詞について類別に分けたもの）等の数値について以下にまとめた。

表：活用行別

	尾崎本			青洲本		
	音便	非音便	不明	音便	非音便	不明
カ行	18	3	17	32	4	2
ガ行	7	0	0	7	0	0
サ行	18	16	8	23	17	2
タ行	7	0	9	15	0	1
ハ行	13	14	2	15	14	0
バ行	3	0	0	3	0	0
マ行	4	0	1	5	0	0
ラ行	78	4	23	100	5	0

表：文体別

	尾崎本			青洲本		
	音便	非音便	不明	音便	非音便	不明
歌	0	2	0	0	2	0
会話	26	6	10	33	8	1
地の文	122	29	50	167	30	4

表：アクセント型別

	尾崎本			青洲本		
	音便	非音便	不明	音便	非音便	不明
2拍1類	22	4	19	40	5	0
2拍2類	41	9	30	68	9	3
3拍1類	23	3	4	27	3	0
3拍2類	19	11	3	20	13	0
3拍3類	1	1	0	1	1	0

活用行別について見ると、カ行・タ行・ラ行等の音便率の高い行に「不明」が多く見られ、ハ行のように音便形・非音便形ともに多く見られる行はそれほどでもない。これは「音便を起こす（起こさない）とわかっている場合にはあえて表記しない」という前節の動詞別の傾向によるものと考えられる。

文体別では従来の指摘通り和歌において音便形が用いられないが、会話文と地の文については、尾崎本とともに音便率60%前後、青洲本とともに音便率80%前後となっており、差が見られない。

アクセント型別については特筆するところはない。3拍2類にやや非音便形が多いのは、音便を起こさない動詞「給ふ」の頻出によるものである。

なお、アクセントに関連して譜記に言及すると、尾崎本と青洲本とでアクセント型にかかわる譜記の相違例は5例ある。

	尾崎本	青洲本	
①	巻て (上××)	巻いて (×上×)	巻二上・蘇武
②	承って (××××上×)	承って (××上×××)	巻二下・青山
③	聞いて (×××)	聞いて (×××)	巻二下・横笛
④	参って (×上上×)	参って (上上××)	巻二下・横笛
⑤	ついで (上××)	ついで (×××)	巻二下・泊瀬六代

動詞のアクセント型からして、①④⑤は尾崎本の、②③は青洲本の表記が本来形と考えられる（④については非音便形であれば○●○▽（○…低拍、●…高拍）となるところが、促音便によって核が後退し、○●●▽となったものと考えられている）。もう一方の表記は、それぞれ譜記の脱落（省略）やズレによるものであろう。

2-5. まとめ

以上、尾崎本と青洲本の巻二における音便表記について述べたことをまとめると次のようである。

- *尾崎本と青洲本とで音便の有無が異なる例は1例のみである。
- *青洲本は音便の有無のわかる表記がほとんどであり、数少ない例外は他の用例から見当が付く（おそらくは当時自明のものであった）動詞である。尾崎本は青洲本よりも「不明」の用例数は多いが、傾向としてはこれと同様と考えられる。
- *大系本で「非音便」であった例が、平家正節2本では「音便」となっている例が多く見られ、成立年代による差が反映しているものかと考えられる。

3. 濁点

濁点が付されているのが仮名・漢字・振り仮名のいずれかによって分類すると次のようである。（ ）内には巻一での調査結果を参考として示す。

	尾崎本巻二	青洲本巻二	尾崎本巻一	青洲本巻一
仮名	691	883	(704)	(836)
漢字	59	381	(175)	(524)
振り仮名	24	139	(25)	(304)
合計	774	1403	(904)	(1664)

仮名についてみると、尾崎本・青洲本ともに巻一と巻二とでほとんど差が見られない。もともと巻一の調査において、本文の仮名については、いくつかの助詞をのぞいて「濁音にはほぼ濁点を付す」という方針がとられていた。巻二もそれに準じると考えて良からう。しかし、漢字や振り仮名については、尾崎本の振り仮名（尾崎本ではもともと振り仮名自体があまり用いられない）を除いて、全体的に巻一に比較して数が減少している。使用される文字種の割合も考えねばならないが、おおまかには巻一（最初）でわかりやすく濁点を付し、巻二では既に明らかなこととして省略する傾向にある（仮名を除く）と考えられようか。

4. その他発音注記

濁点以外の主な発音注記は以下の通りである。

	尾崎本	青洲本
ツ メ	2	49
ノ ム	0	23
ス ム	3	27
半濁点	5	10

これらもやはり青洲本に多く見られ、「スム」の3例中2例をのぞくと、尾崎本にある発音注記はいずれも青洲本にも付されているものである。以下に具体的な用例を挙げる。なお、用例は特に注記がない限り青洲本のもを提示し、尾崎本にも見られる用例には下線を付す。●印は発音注記のある箇所を示す。

4-1. ツメ

ツメの用例を、注記の後の音別⁵⁾に分けて示す。

+カ行音

悪●口、闕●官、闕●国、国●懸、典属●国、仏●果

+サ行音

浅まし●さ、あづかつ●し、恨メ●しさ、うれ●しさ、左●史生（2例）、
さつ●さつたる、達●者、なつか●しさ、列●し

+タ行音

有●つて、入●つて、うつ●たへ、却ツ●て、鴈札●とも、公達●たち、削●
て、黒帥●とぞ、す●つて、大菩薩●と、奉●つたり（2例）、奉●つて（2例）、
塗●たり、ひいふつ●と、振●つて、別●当、参●つて、まいら●つさせ、持
●つたり、破●つて、よ●つて

語末

新月●白く、五節●豊、三月●十三日、三月●十五日、三月●廿、十一月●二
十三日、十月●四日、十二月●十日、正月●五日、二月●十日

4-2. ノム

ツメと同様、後続音ごとに用例を記す。

+ザ行音

末●座、讚仏●乗

+ダ行音

末●代（3例）

+ナ行音

一筆●の、岩窟●の、黒漆●の、五節●に（2例）、三月●に、執筆●の、出●
入、正月●の、大切●の、念仏●の、別●の、名物●なり、右弼●の、六月
●の

語末

近日●人々、五節●果て、権の帥●季仲

4-3. スム

音読み語頭

●玄上（3例）、●号して、●次官、●述懐、●上玄、●上古、●上座、●上西
門院、●上洛、●上林苑、●大將軍、●大唐（2例）、●殿上人、●童形

音読み語中

海巖●山、花●族、住●国、盃●盤

訓読み語中

企●たつ、頸●際、黒●々、さ●かしげに、給ひし●か、べき●か、
目●指（尾崎本のみ）、猪の●熊（尾崎本のみ）

4-4. 半濁点

天●晴（2例）、一●筆、追●ばなつ、君●辺に、源●平（2例）、実●否、
仁●平、よつ●びひて

尾崎本は「君辺」をのぞいて前部成素の最後が撥音の場合には半濁点を付さない傾向が見られる。「君辺」は大系本で「くんべん」と読まれており、この読みを避けるために敢えて半濁点を付したものであろう。

他にも一見して読みとれる傾向もいくつかあるが、濁点及びその他発音注記についての考察は稿を改めたい。

表：各本における動詞別音使用例数

（○…音便形、×…非音便形、？…不明。——該当例ナシ）

	尾崎本			青洲本			（参）大系本				合計
	○	×	？	○	×	？	○	×	？	—	
あく		1			1			1			1
おく	1	1	3	4	1		4	1			5
おちつく			1	1						1	1
おどろく	1			1			1				1
かがやく	1			1			1				1

かく	2		2	3		1	4				4
かたぶく	1			1				1			1
かづく	1			1			1				1
きく	3	1	3	5	2		3	2		2	7
しく			1	1			1				1
たなびく	1			1			1				1
つく	1		2	3			1			2	3
とく	1		1	2			1			1	2
とりつく			1	1			1				1
なく			1	1			1				1
のぞく	1			1			1				1
ひひめく	1			1			1				1
ひらく	1		1	2			1			1	2
まく			1	1						1	1
ゆく	1			1			1				1
よっぴく	1					1	1				1
力行合計	18	3	17	32	4	2	25	5	0	8	38
つぐ	3			3			3				3
なぐ	1			1			1				1
ぬぐ	1			1						1	1
はぐ	2			2			2				2
ガ行合計	7	0	0	7	0	0	6	0	0	1	7
あそばす	1			1				1			1
あらす		1			1			1			1
いからかす	1			1				1			1
いだす	5			5			1	3		1	5
おこす	1	1		1	1		2				2
おす			1	1				1			1
おとす	1			1				1			1
おはす		1			1					1	1
きこしめす			1			1				1	1
さす	1	2	3	4	2		3	1		2	6
しろしめす			1			1				1	1
すます		3			3			2		1	3
だす	1		1	2				1		1	2
ためす	1			1			1				1
ともす	2			2			2				2

ながす	1			1					1	1	
なす		3			3			1		2	3
はづす	2			2					2		2
ふす		1			1			1			1
めす		2			1	1		2			2
まうす		1	2		3				2	1	3
わたす	1			1				1			1
サ行合計	18	16	8	23	17	2	9	17	2	14	42
うつ			1	1			1				1
かつ	1			1						1	1
たつ	1			1			1				1
もつ	4		7	10		1	9			2	11
よだつ	1		1	2			2				2
タ行合計	7	0	9	15	0	1	13	0	0	3	16
あふ	6			6			4	1		1	6
おふ	1			1				1			1
おもふ	1			1			1				1
からかふ		1			1			1			1
しつらふ	1			1			1				1
そふ		1			1			1			1
たまふ		9			9			2		7	9
ぬふ			1	1			1				1
のたまふ		2			2					2	2
ひろふ		1			1			1			1
むかふ	2		1	3			2			1	3
ゆふ	1			1			1				1
わらふ	1			1			1				1
ハ行合計	13	14	2	15	14	0	11	7	0	11	29
およぶ	2			2			2				2
むすぶ	1			1			1				1
バ行合計	3	0	0	3	0	0	3	0	0	0	3
くむ	1		1	2				1			2
すむ	1			1			1	1			1
わきばさむ	1			1			1				1
よむ	1			1			1				1
マ行合計	4	0	1	5	0	0	3	2	0	0	5
あがる	2			2			1			1	2

ある	3		4	6	1		6			1	7
いる	1		2	3				2		1	3
うけたまはる	5			5			2		1	2	5
おくる	1			1						1	1
かしこまる	3		1	4			2			2	4
かはる		1			1			1			1
かへる	1			1					1		1
きたる	3		1	4			2			2	4
きる	3		2	5			5				5
けづる			1	1			1				1
さがる	1			1			1				1
しる	1			1						1	1
する	1			1			1				1
たぎる		1			1		1				1
たてまつる	11			11			5	1		5	11
たまはる	4			4			1	2		1	4
つかまつる	2			2						2	2
つかる	1			1			1				1
つくる	2			2			1	1			2
てる	1			1			1				1
とどまる	1			1			1				1
とる	11	1	5	16	1		13	2		2	17
なのる	1			1			1				1
なる	4		1	5			3			2	5
ぬる			1	1				1			1
ののしる	1			1						1	1
のぼる	4			4			2			2	4
のる	1			1			1				1
ひたる	1			1						1	1
ふる			1	1			1				1
まゐる	1	1		1	1			1		1	2
やぶる	1			1			1				1
よる	6		4	10			9			1	10
ラ行合計	78	4	23	100	5	0	63	11	2	29	106
総計	148	37	60	200	40	5	133	42	4	66	245

※本研究はJSPS科研費22520474の助成を受けたものです。

注

- (1) 拙稿「平曲譜本の濁点注記—尾崎家本平家正節と青洲文庫本平家正節—」(『言語文化学研究日本語日本文学編』第4号・平22)
- (2) 金田一春彦氏「『平家正節』の祖本」を疑う(『芸能』18・9・昭51・9)に始まる、渥美かをる氏との一連の議論等。
- (3) ()内はその本における音便の有無のそれぞれの割合を示す(音便もしくは非音便の用例数/合計用例数によって算出)。また、参考までに大系本でのそれも示しておく。ただし、尾崎本・青洲本での用例を基準にしており、大系本のそれ以外の箇所該当例があっても拾っていない。参考数値とする所以である。
- (4) 大系本にもこのような判定不可の用例がいくつかあるが、こちらの場合は「該当する箇所なし」ということが多い。ここではこれも「不明」として数えている。
- (5) 本文の読みがないものについては適宜判断して分類を行った。他の音に振り分けべきものがあるかもしれないが、後続音について大まかな傾向は認められるであろう。

(おくむら かずこ・本学准教授)